



特 71
718

301301-001-6

特 71-718

薩摩琵琶歌

琵琶歌研鑽会 / 編

M45.2

CEJ-0001



北薩麻

琵琶

持 71

琵琶

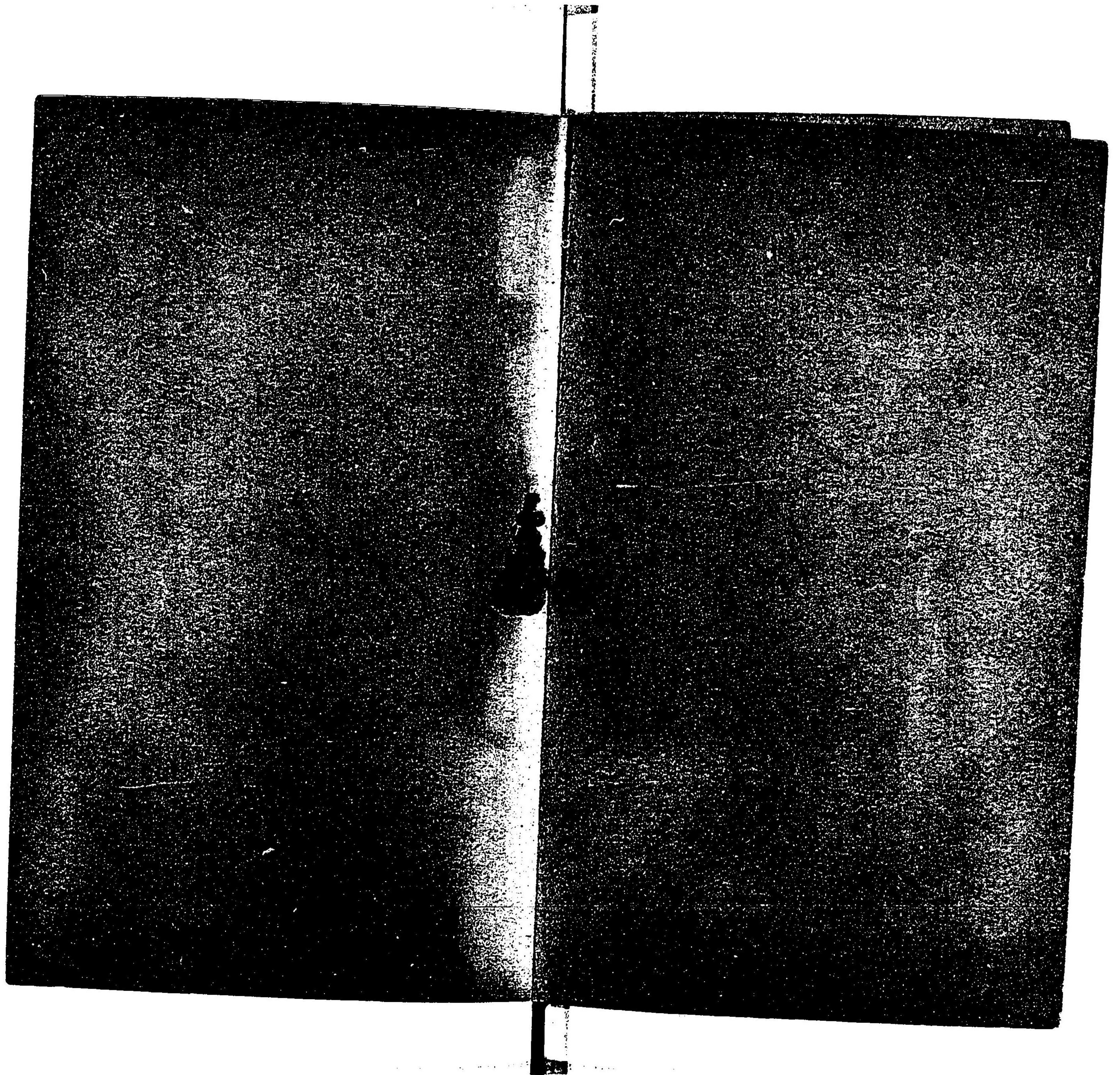
718

歌



266
877

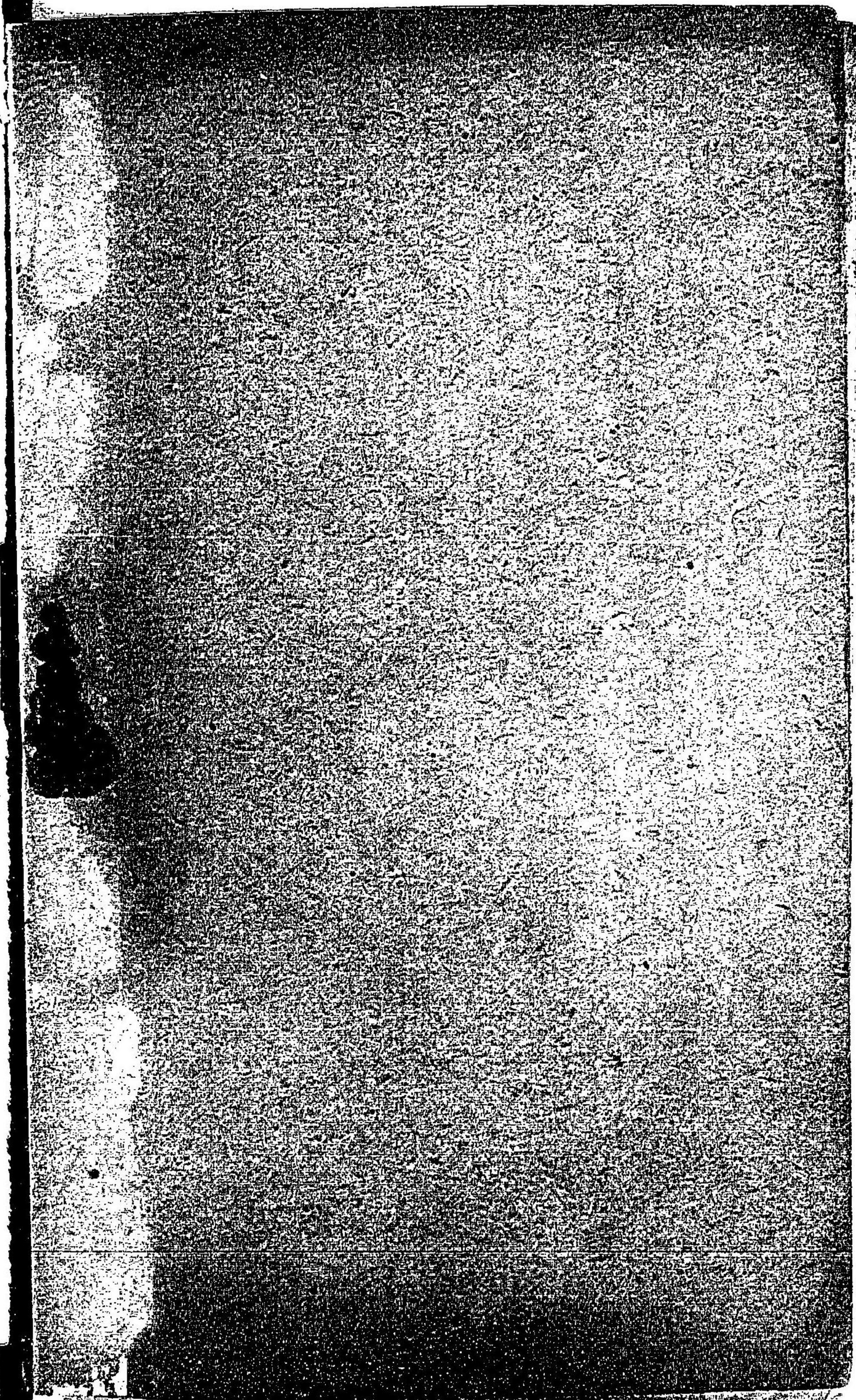
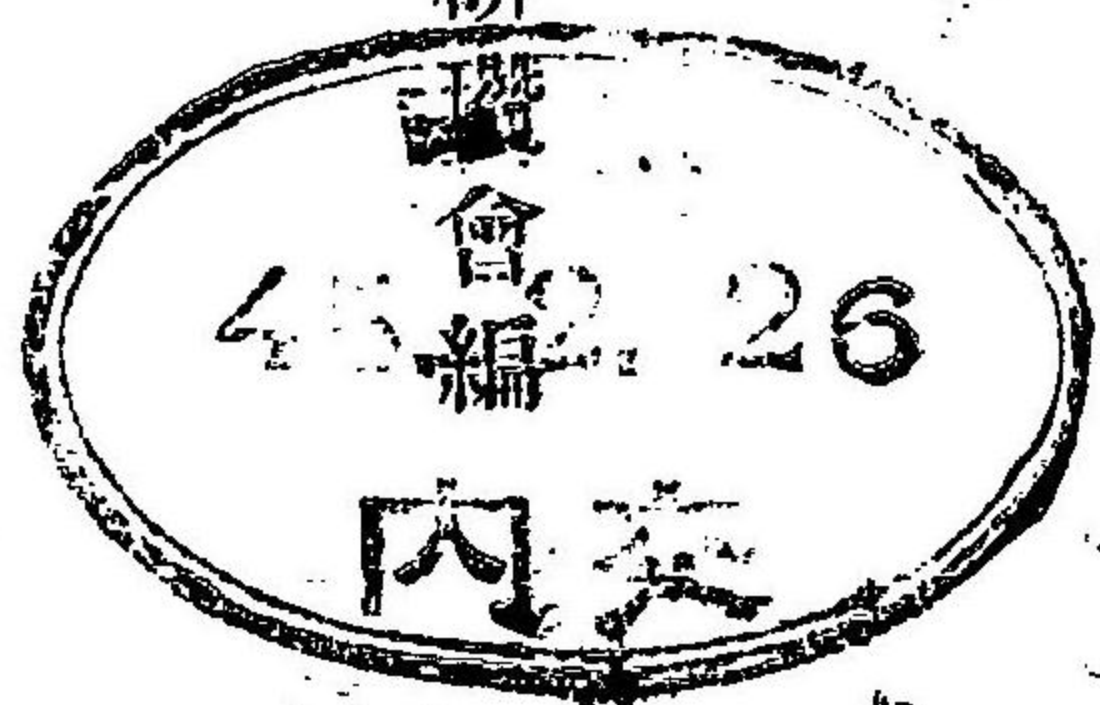
15855





薩
摩
琵
琶
歌

琵琶歌研



待つ
うは

獨吟琵琶歌に序す

時に鬼をも挫ぐ猛將軍を泣かせ、時に懦者を奮起せしむるもの、蓋し琵琶歌ではあるまいか、古來武人も劍を收めて之を聽き、文人も之を彈じて花月を賞でたと云ふ、實に花咲く夕月の夜など玉羅をもれ來る琵琶の音を聞いては、誰か耳を欬て心を動かさ

2 獨吟琵琶歌目次

○川	中島	二
○本	能寺	三
○森	蘭丸	四
○太	田道灌	四
○毒	饅頭	四
○櫻	狩	五
○國	船	五
○王	昭君	五
○老	蘇の森	六

3 獨吟琵琶歌目次

○迷	信もとま	六
○武	藏野	六
○送	別	六
○松	囃	六
○蓬	菜山	六
○小	敦盛	七
○全	二	七
○那	須與市	九
○俊	寛初	九

次目歌琵琶吟獨 4

○全 二段……………六

○石 童 九……………九

○小 督……………一〇三

目次 終

吟者の心得へき事

一、琵琶歌を吟ずるには、吟者先づ歌の真意を解することが緊要である、歌意を解せずして吟ずるは、吟ずるといふよりも寧ろ朗讀と云ふに過ぎない。

一、琵琶歌の主眼とする所は熱中である、真の意氣である、聲音の美、曲節の巧妙などは第二の問題とする所である。

一、天性の美音であつても、節廻しが如何に巧妙であつても歌意を解せず、真の意氣を現はすことが出来ぬやうでは全く尋である。

1 事さべ得心の者吟

一、最も聲音美にして、曲節の變幻巧妙に達し、意氣あり熱中あれば、既に名人の域に達したと云ふべしである。

一、琵琶歌には一定した節がない、従つて吟者の研究に任すより外はないと思ふ、併し初學者には何等かの標準なくしては、吟ずることが甚だ至難である、茲に於てか即ち歌譜の必要ある所以である、歌譜素より一の標準に過ぎないのであるから、吟者自ら標準となるべき歌譜を編み出して用ゐれば、却て利益であらうと思ふが、今本書に用ゐた歌譜に就て、一寸説明して見やうと思ふ。

●の符號を大千とする、大千とは吟者の最も高い音聲にて歌

ふを云ふのである。

○の符號を中干とする、中干とは地聲と大千との間の音であつて、結句に節を用ゐるのである。

◎の符號を崩れとする、少しく調を早めよといふ印であるが、前後緩急の度に注意するが肝腎である。

・の符號を吟替とする、此吟替は最も悲哀を罩めた調を以て歌ふを要するのである。

△の符號を切りとする、切りは文章の段落であるから、先づ大聲にて歌ひ、段々聲を下げ、更に語尾を上げて落切らな

ければならない。

「の符號を句切りとする、音聲を止めてはつゝと切り切るの
ある。

以上示す所の符號は、固より大體に過ぎない、吟者は之に準ずる
と共に、更に琵琶の彈奏を聴取して自ら研鑽努むるの必要あるは
言を俟たないのである。

ツボトケ獨吟琵琶歌

琵琶歌研鑽會

○金剛石

金剛石も磨かずば、玉の光は添はざらん、人も學びて後にこそ切
「まことの徳は顯るれ、大千時計の針の絶間なく、めぐるが如く
時の間も、日影惜みて勵みなば、如何なる業か成らざらん」水は
器にしたがひて其のさまじくに成りぬなり、人も交る友により切
「善さに悪さに移るなり」己にまざる善き友と、選り求めて諸共

獨吟琵琶歌

に、心の駒に鞭うちて 切學びの道に進めかし、

○千代の春

かゝる目出度御代なれば、國々諸所に至るまで千代の春千歳の切
「秋と樂むも」、大千「これ皆君の惠みの深きゆへぞかし」いよく
君を仰ぎ奉る、思ひおもひの殿づくり、いからを並べ軒を列ね、
高殿樓閣を構へ、旭の光り夕月の影うつる、光りの輝くは、言も
おろかに思はれて、庭には金銀の砂石を敷き、四方の園はおびた
だし、不老門を出入る人は、皆袖をつらねて、色はゆる、これや
名に聞く天の羽衣、切「仙境の春の樂しみも斯くやあらん」かほと

獨吟琵琶歌

治まる御代なれば、吹く風までも、枝を鳴らさずといへば、また
人として君が此の代を、千代萬代と、祈らぬものはなかりけり。

○白虎隊

花は櫻木人は武士、散るべきときに散らざれば、いかでか人に惜
まれむ 大千「こゝに會津藩士の子弟にて 中千「白虎隊と稱へし
は、日新館の青年を、選抜したる一團にて、年齢僅か十五六、十
七歳を頭に、中千「忠勇義烈たぐひなし、學びの窓に筆おきて、
劍をとつて青天を、睨む姿の雄々しくも、堅き心の結ばれて 中千
「首將の許に馳せつけぬ、早やこの時は若松の、あたりは敵の領

となり、城内のはれ兵はつき、残るは老木の梓弓かよはき、婦女
子ばかりなり、主君の安危を己が背に、負ふて其の身を願ぬ、少
年隊の勇々しくも、敢死隊の左翼となり 崩し戸の口原に打ち向
ひ、群がる敵に斬て入る。折しも吹くや荒風の、雨も一時に篠を
つき、晝尙くらき修羅の場、雷鳴山岳を震動し、忽ち放つ電光の
それにもまさる早業の、ひらめく影は白虎の如く、猛りにたける
丈夫が、息をもつかず戦ふも、寄せ来る敵は數多く、防ぐ味方は
限あり、僅に一方に斬りぬけて、生残る者十餘人 大千「慶應戊辰
八月の 中干」後の三日の東空に、瀧澤峠の嶮を越え、數ヶ所の痛

手に迸しる、血汐は雨の袖を染め、兵糧だにもついかねば、飢と
疵とに疲れ果て、折れたる刀を杖にして、飯盛山に攀ぢのぼり、
鶴城はるかに見渡せば 吟替「黒煙天に漲りて、昨日にかわる今日
の状況、おはれ望みもつきてりな、主君を始め奉つり、我が父母
に今生の、別れを告げんと跪づき、涙ながらに伏し拜む、心のう
ちぞ憐れなり、この時早く一人は、取出したる短冊の、母の賜ひ
し和歌一首、この世の別れと讀みあげて、我がことごとくに止みた
りな最早何せん術なしと、たちまち光る一刀を 中干「小脇にぐつ
と突き立て、物の見事に引廻す、かたへの一人おくれじと、秋

水逆手に我が咽喉 中干「束も通れと貫きぬ、其他もこれに前後して、何れも年は蓄なる、若木の花を誘ひ来る、おはれ無情の風吹きて、いと自覺しく自害して、秋の錦を織る山を 切「染むる血汐どなりにけり、これより先きに魁けて、戦没したる少年の、屍を拾ひ集め来て、この丈夫と相並べ、飯盛山の絶頂に、輝く碑銘は後の世の、士氣を鼓舞する基にて、今に傳えて惜しまるゝ、

少年團結白虎隊、 國步艱難守「堡塞、
黃塵掩「天白日暗、 警報交至四「疆内、
忽捲「風雨「大軍來、 巨砲連發「僵死堆、

白虎一隊自「虎健、 殺生過當何「狀哉、
衆寡不「敵戰且卻、 身裏「創瘻「口含「藥、
腹背皆「敵今何「行、 杖「劍間「行攀「丘岳、
南望「鶴城「黑煙揚、 社稷「已「亡我「事止、
一死唯「應「償「君恩、 十有「六「人「心「肝「鐵、
遙拜「鶴城「淚潜々、 意氣「從「容「屠「腹「死、
あ、天何ぞ武夫の、義氣と誠をこのまゝ、空しく暗に葬むらん、
今に其名は香りけり 中干、萬世不朽の白「虎隊、櫻の花のいらぬよ
く、散る真心の紅は、紅葉に耻ぢぬ若葉ごと、惜まぬものとてな

歌 琵琶 吟 獨

かりけり キリ「惜しまぬものとなかりけり、

城 山

夫れ達人は大観す 中干「拔山蓋世の勇あるも キリ「榮枯は夢か幻
か 大千「大隅山の狩倉に、真如の月の影清く キリ「無念無想を觀
すらん 大千「何を怒るか怒り猪の、俄かに激する數千騎、勇みに
勇む隼り雄の、騎虎の勢一徹に 中干「留まりがたきぞ是非もなき
たし身一つを打捨て、若殿輩に報るなむ 崩「明治十年の秋の
末、諸手の軍は打ち破れ、討ちつ討たれつやがて散る、霜の紅葉

の紅の、血汐に染めどかへりみぬ、薩摩武夫の雄たけびに 打ち
散る玉は板やうつ、霞たはしる如くにて、面も向けん方ぞなき、
木精に響く関の聲、百の雷一時に、落つるが如き有様を 大千「陸
盛打ち見てほくぞ笑み、あな勇ましの人人や、亥の年以來養ひし
腕の力も試し見て、心に残ることはなし、いざ諸共に塵の世を、
脱れ出でんはこの時と、たゞ一言を名残にて、桐野村田を始めと
し、宗族の輩一徹に、煙りと消えし大丈夫の キリ「心のうちこそ
ゆかしけれ 吟替「官軍これを望み見て、昨日までは陸軍大將と仰
がれて、君の寵遇世の覺へ、比類なかりし英雄も、今は敢なく岩

崎の、山下露と消え果て、移れば變る世の中の、無情を深く感
じつゝ、無量の思ひ胸にみち、たい悄然と隊伍を整へ 中干「目と
目を見合すばかりなり、折しもあれや吹下ろす キリ「城山松の夕
嵐、岩間に咽ぶ谿水の、無常の聲は何となく、悲鳴するかと聞き
なされ キリ「鎧の袖をぬらすらむ、

月 照

花の都も秋はなほ、夕さびしき風情なり、名は流れたる清水や、
落ち来る瀧の音羽山、秋の葉色のみぞことに キリ「散るや紅葉の

ちりぐと 大干「亂れ行く世の浪花江や、蘆のさはりばしげくと
も、なほ世のために身を盡し、つくさむとても筑紫瀉、波影の岸
に浪ならぬ、操も何時か深みどり 中干「驛路を越へて香椎瀉、多
々羅の橋をうち渡り、千代の松原千代かけて、萬代かけて君が代
の、千歳の松によそへつゝ神に歩みを筥崎の「社にかけし四つの
文字、筆の主をよく問へば、延喜の帝かしくも 中干「御手を下
しませりとぞ、こゝも昔は石だゝみ、かさねくし白浪の、寄
し昔をわすれじと、恨み浦曲の片だすき、かけて嘆くも哀れなり
濡衣塚の濡れころも、吾が身に着けたる心地せり、やがて博多の

假住居、こゝも浪風さはがしく 大千「また行く先は薩摩瀉、沖の
小島にあらねども、心ほそくも都にて、誰か憐れと思ふらむ、た
よる心は筑紫瀉、一人の外に打ち明けて、語らふ人も浮き枕
浪路へだて、野間の關、せき止められてまた舟に、ゆられく
行く先は、黒の瀬戸てふ名も憂しや、頓て鹿兒島籠の鳥、翼ち、
めて潜みしが 中干「また木枯におどろきて、日向を指して船出せ
し、日は神無月望の夜の、かたむく月と諸共に、照りかがやきて
曇りなき 中干「身は大君の御ためと、こゝに一人の薩摩人、如何
なる縁し前の世に契もふかき船の内、底の藻屑となりぬるを、乗

合ひ人も船人も、擢の雫の露はども 切「さりとは知らず白波の、
立ちさはげども 甲斐ぞなき、なほ東雲のあけ鴉 切「なくより外
はなかりけり。

母の誠

木の葉皆、身にしむ風に誘はれて 中干「散りて行手の山は瘦せ、
軒端あらはに見えわたる 中干「草の家居に夜は更けて 切「糸線
る音の幽かなる 大千「山の端高く月冴えて 中干「かどの板橋霜白
し、傾く軒の燈火は、夜なく細く輝きて、紡ぐ車を照すなり、

頭に戴く白雪は、瘦せたる顔に降かり、老いたる身にはさくが
にの、糸とる業の苦しきも 中干「出で戦ふ己が子の、苦勞を思へ
ばいと輕し、

綱引する、舟の夜寒を、身にしみて、

寝られぬ妻や、衣摺つらむ、

と漁る人を思ひやり、ねられぬ妻が寒き夜は、衣を摺つて夜を明
す、是とかわれど愛情の、心は同じ母親は 中干「我が兒の困苦
を忍びかね、指先さ凍る冬の夜も、厭はで紡ぐ健氣さは、是も同
じく國のため、また大君の爲めならむ 吟替「立つ霜柱踏み分けて

朝なく、に母親は、鎮守の森に武運をば、我が身に代へて祈りけ
り、真心こめての祈願には、神も哀れと思召し、勳を立てま
せたまはんは、鏡にかけて見る如し、紡ぎし糸を布となし、送り
し先は大丈夫が 中干「深手淺手の差別なく、包むたつきとなり
もせむ、恐れは多き事なれど、皇后陛下の御心に、露程叶ふもの
ならば 中干「老ひの身にとりこよもなし、足曳きの、山の奥なる
草の家に 中干「老ひ栲ち果てし女さへ思ひ思ひの業をもて 中干「
國につくさむ真心を、思へば猛き御軍の、前にたつべき敵なきは、
今更いふも愚なり 切り「今更いふも愚なり。

七 卿 落

世は新菰と亂れつゝ、茜さす日もいとくらぐ、瀬見の小川に霧立ちて、切「隔ての雲となりけり、大千「ある痛ましや魂消る、うち且暮宿直せし、實美朝臣に季知卿、玉生澤四條東久世其の外錦の小路殿、中干「身は浮萍の定めなき、旅にしあれば駒さへも、進みかねてはいなきつ、降りしく雨の綿間なく、涙に袖は濡れ果て、大千「これより海山淺茅原、露霜分けて蘆が散る、浪華の浦に焚く蘆の、からさ浮世は物かはと、ゆかんとすれば東

山、峰の秋風身にしてみて、朝な夕なほ聞きなれし、明法院の鐘の音も、切「さえて今宵は哀れなり、いつしか暗き雲霧を、拂ひつくして百敷の、切「都の月をし愛でたまふらん、

元 寇

聖人位にあるときは、麒麟その國に出づるとかや、明王政事をなしたまへば、英雄執權の職にあたる鎌倉山の松の風、切「浪の音かと疑はれ、大千「龜山院の秋の月、何をおぼるに霞むらん、西天遙に見わたせば、我に仇なす仇の船、群がりつとふ誰や彼、蒙

古の王忽必烈は祖宗鐵木眞の遺訓にもとづき、世界統一の大業を
 その一代に遂げんとて、慳貪邪惡飽くことなく 中干天魔破句の
 狂威をふるひ、ウラルの東渤海の北領土ならざる土地もなく、
 藩屬せざる國もなし、四百余州を平けて、宋の天下を奪ひしより
 貢するもの一千餘國、草も木も靡き従ふそがうちに、獨り東海の
 日本國、貢をいれぬのみならず、執權北條相摸太郎 大千一命に應
 せず使者を斬り、首を軍門に斬りかけて、六十余州に號令し、防
 禦おさく怠りなし、忽必烈愼意の炎燃し、いざや日本を攻め
 つぶし、蒙古の領土となさんとて、大軍しばしば進來す、文永の

春弘安の秋、民の心は安からず、市に米賣る商賈なく、里に飢よ
 む窮民あり、ついで起る國難は、朕が不徳と身をせめて、位を
 ゆづらせたまひける、龜山上皇聞し召し、いごい宸襟を惱まさせ
 たまふ、されば王城の地いと危し、御座を關東へ移させたまへと
 申し上ぐるもゆるさせたまはず、朕不徳の故を以て、この國難は
 おこりつれ、民の塗炭を後に見て、いかでか朕のみまぬかるべき
 王位は今上のしるしめす、政事は鎌倉に執權あり、ありて甲斐な
 きこの身なり、甲斐なきこの身をうち捨て、吟替捨てい甲斐あ
 る時ならば、露玉の緒のおいからず、さらばとばかり御手づから

御筆を染めさせたまひ、神風や伊勢のみをやの大神に、わが命召
させたまひて、この國難を救はせたまへと、御祈願こめさせたま
ふ、人には夫れと岩清水、ひとり御行と夕まぐれ、鳳凰の戸張を出
でさせたまへば、御側に侍る人々は、龍衣の袖をおさへつゝ、い
としかしこき玉體を、かるしめ給ふは何事ぞ、思し止めさせたま
へと、申上るを汝等の、知れるところにあらずとて、永き夜の
と夜をこめし御參籠、大御心ぞありがたけれ上にかゝる仁天の君
あり、下義地の臣なからめや 大千「執權時宗の號令に 中千「千軍
萬馬猛者勇者、目にあまりたる大軍を、おめす慮せず防戦す、頃

は弘安四年閏七月一日、上皇御祈願滿願の、あかつき西九州の空
崩レ「二天俄にかさくもり、天地山河鳴動し、一陣狂るふ大わら
し、神軍天馬に鞭うちて、魔王の城を攻むること、浪は怒つて高
島の、沖に四千の蒙古勢、塵か芥か浪の上、群がり集ふ十萬の、
仇の命は大和田の、底の藻屑となりけり、執權時宗の果斷勇決
鎮西將士の忠勇無雙、この大勝を招きしは、云ふもおろかのこと
なれど、これ偏に龜山上皇の、内因讎を忘れ外大敵にあたらせた
まひ、身をも捨てんの御宣命、至誠天地を感動し、祖宗の冥護神
風と、なりて蒙古を吹きはらひ キリ「はらひ清めたまひしなれ、

六百年の春秋を、枯れず萎ます今の代に、昔を偲ぶの語り草切
「語り傳へて繁げるらん、

俊基東下り

落花の雪に踏み迷ふ 中干「片野の春の櫻狩、紅葉の錦着て歸る中
干「嵐の山の秋の暮れ、一と夜を明かす程だにも、旅寝となれば物
憂きに 中干「恩愛の契り淺からぬ、我が故郷の妻子をば 切「行
衛も知らず残し置き 大干「年久しくも住みなれし 中干「九重の都
をば、今を限りと願みて 切「思はぬ旅に出でたまふ、心のうちこ

を哀れなる、憂をば留めぬ相坂の、關の清水に袖濡れて 中干「未
は山路を打出の濱、沖を遙に見渡せば、鹽ならぬ海にこがれ行く
中干「身を浮船の浮き沈み、駒もどいろと踏みならず、勢多の長
橋うち渡り、往き來ふ人に近江路や、世をうねの野に鳴く田鶴も、
子を思ふかと哀れなり、時雨もいたく森山の 中干「木の下露に袖
ぬれて、風に露散る篠原や、篠分る道を過ぎ行けば、鏡の山はあ
りとても 中干「涙にくもりて見えわかず、物を思へば夜の間にも、
老蘇の森の下草に 切「駒を止めて願みる 大干「故郷を雲や隔つ
らん 中干「馬場醒ケ井柏原、不破の關所は荒れ果て、猶もるも

のは秋雨の 中干「何時か我が身の尾張なる、熱田の八劔伏し拜み
沙干に今や鳴海瀉 中干「傾く月に道見えて、明けぬ暮れぬと行く
途の、末はいづくと遠江、濱名の橋の夕沙に 中干「引くも人なき
捨小舟、沈み果ぬる身にしあれば 中干「誰かは哀れと夕暮の、入
相なれば今はとて 中干「池田の宿に着き給ひしに、
東路の、埴生の小屋の、いふせきは、

故郷如何に、戀しかるらむ、

と長者の女が詠みたりし 中干「その古の哀れまで、思ひ残るぬ涙
なり、旅館の燈火幽かにして、鶏鳴曉を催ふせば 中干「一匹馬風

にいななきて 中干「天龍川を打ち渡り、小夜の中山越えぬれば、
白雲道を埋め来て、そことも知らぬ夕暮に、家郷の空を望みても、
昔西行法師が、命なりけりと詠じつゝ、二度越えし跡までも、浦
山敷ぞ思はれける 中干「隙行く駒の足早み、日已に亭午にのぼれ
ば、餉參らする程にとて、興を庭前に下し 中干「轅をたいて警
固武士、近づき宿の名を問ひ給へば 中干「菊川と申すなりと答え
ければ、承久の合戦の時、院宣書きたりし咎によりて、光親卿關
東へ召下れしが、この宿にて誅せられしとき、

昔南陽縣菊水、汲三下流而延齡、

今東海道菊川、宿西岸而終命。

と書きたりし、中干「遠き昔の筆の迹今は吾が身の上になり、中干「哀れはいといまさりけん、一首の歌を詠じて、宿の柱に書かれける。

古も、かゝるためしを、菊川の、

同じ流れに、身をや沈めん

中干「大井川を過ぎたまへば、都にありし時名を聞きて 中干「龜山殿の行幸の、嵐の山の花盛り、龍頭鷲首の船に乗り 中干「詩歌管絃の宴に侍りしことも、今は二度見ぬ世の夢と 中干「なりぬと

思ひついでいたまふ、島田藤枝にかゝりては、岡邊の真葛裏枯れて、物かなしき夕暮に 中干「宇都の山邊を越え行けば、葛楓つと茂りて道もなし、昔時業平中將の、住所を求むとて 中干「東の方に下ると、夢にも人に逢はぬなりけりと、詠みたりしも、斯やど、思ひ知られたり、清見瀉を過ぎ給へば、都に歸る夢をさへ、通るぬ波の關守に 中干「いと涙を催され、向ひは何處三保ヶ崎、興津蒲原早過ぎて、富士の高根を見たまへば、雪の中より立つ煙り、上なき思ひにくらべつゝ、明くる霞に松見えて 中干「浮島ヶ原を過行けば、沙干や浅き船浮きて、おり立つ田鶴の自らも、浮世を

繞ぐる車がへし、竹の下道行き惱む、足柄山の峠より、大磯小磯
見下ろして、袖にも波は小ゆるぎの、急ぐとしもはなけれど、
日数つもれば、七月二十六日の暮頭は、
ひげれ。

潯陽江

紅葉うつろひ蘆が散る、秋の哀れのいと深き、潯陽江の夕まぐれ
友の船出を送り来て切「別れを惜む盃の」大干「数重なれど絲竹
の調べもそはぬ寂に、本意なき事と思ひつゝ、影遠白き波の

上切「月打守る折しもあれ」大干「忽ち聞ゆる琵琶の聲、思ひも掛
ぬ事なれば、互に心とさめきて歸らん事も行く事も、忘れ果つゝ
其聲を、尋ねて誰ぞと音なへば」打潜まりて答なし、船漕寄せて
酒をそへ、燈かかげ又更に、宴の庭打開き、琵琶のあるじを招け
ども、頓には出でこず、百干たび、喚立られてしぶくゝに、此方
の船に移り來ぬ、琵琶を抱きてまはゆげに、面を掩ひ弾初めし中
干「其撥音にいひしらぬ、深き情のこもりつゝ、」弾行く儘に常々
の、おのが心の嬉しさを、訴へ出る心地せり、人こそ知らぬ濱ゆ
ふの、百重かさなる憂思ひ、積る怨みの數々を、四筋の糸にい

すらん、輕くうちゆるく捻り、拂ひつか、げつ初めには、霓裳を
かなで後には、六弦を弾じけり 吟替「大絃は嘈々として急雨の如
く、小絃は切々として私語に似たり、切々と嘈々とこぎ交せて弾
けば、大珠小珠玉盤に落つ、間關たる鶯の聲、花陰に滑かに、幽
咽たる泉流水早瀬を下る」上泉冷澁の趣き凝りて絲を絶え、暫し
聲なき其程は、そいろに憂を催して、聲あるよりも、中々に、風
情を添へし折しもあれ 崩「再び響く撥の音、銀瓶碎けて水迸り
軍起りつ打物の、鏘を削るに鬚髯たり、曲も今はとなりし時、撥を
收めて四の緒を、只一聲にかきなせば、宛から帛を裂く如し、東

の船も西なるも、唯悄然と聞惚れて物言ふ人もあらばこそ「秋の
浦風身に泌て水底白く澄渡る 切「月の影こそ更けにけり」衣を
つくるひ居なほりて、語る詞も口籠り 中干「妾も元は都なる蝦蟇
の陵下の産れにて」十三歳の頃よりも、琵琶の上手と世に知られ
玉を飾れる宮の内、金をしける臺にも、召上せられ遊士の、彼方
此方の會にも、招き寄せられ戯れ合ひさいめさかはし綾錦 かつ
ぎ歸れば家も富み、身も榮へつゝ世の中は 中干「斯くあるものと
愚にも、思ひたのみて華の春 吟替「紅葉の秋と等閑に、日を経る
程に同胞に、親族に離れ去り、朝來りて顔花の、盛りもいつか

杉の門、馬も車も寄り来ねば、世渡るたつさ盡果て、身を浮草の
 根をば絶へ、水のまに／＼誘はれて、情も浅き商人を、夫とする
 だに果敢なきを、其夫遠く旅立し 中干「此浦舟に夜を守る、月明か
 に水寒し、更行く儘にまどろめば、吾身の盛り夢に見て、いと
 悲さ増りぬと、語るを聞きて思はずも、太き溜息つくくと、琵
 琶を聞くだに悲しきを、此物語の哀れさよ、始めて逢へる此人と
 身の際こそは果敢なけれ、我も同じく浮沈み、去年より此所にさ
 すらへて、薄陽城の片遊り 中干「蘆と竹との生繁る、いぶせき中
 に家居して」旦夕に聞くものは、高嶺の猿杜鵑、樵夫の歌や總

巻が、吹鳴す笛の聲ばかり、却つて胸を痛めつゝ、なやみいや増
 す心地して、昔聞つる絲竹の、音なつかしく思ひしに、今宵の君
 が琵琶の音は天つ乙女の音楽を、聞く心地していと嬉し、辞む事
 なく今一ツ、弾きて聞かせよ我も又、歌をつくりて贈らむといへ
 ば 切り「實にもと思ひけん」又も彈ずる撥音は 切「前の聲より
 急がしく」物凄ければ江州の、司馬は更なり並居たる 切「人も袖
 をぞ絞りける。

川 中 島

天文二十三年、秋のなかばの頃とかよ、上杉謙信は、八千餘騎を
 従がへて、切川中島に打て出づ。大干「われこのたびの戦ひは、中干
 武田信玄を追ひつめて、親く雌雄を決せんと、渦まきかへす犀川
 を、渡りて陣をぞとりける、信玄は、この事を聞くより早く、
 二萬餘騎にて打て出で、砦を固めて戦はず、謙信氣をいらち、村
 上義清に言ひふくめ、月影くらさ山々の、草葉の露を分けさせて
 彼方此方に兵を伏せ、樵夫に擬せし兵を、崩し出して甲斐の兵營
 に、近づかしむれば甲斐の兵「謀略とはつゆ知らず、朝露の間に
 追ひまくる」待ち設けたる伏兵は、時こそ來たれと勝鯨波を、ど

どつとあげつ、引きつゝみ、袋に物をとるごとく、一騎ものこと
 ず打ち取つたり、信玄怒つて軍勢を、雲霞のごとく繰り出せば、
 謙信も備へをたてて打ち向ふ、龍おどつて雲をおこし、虎嘯さて
 風を呼ぶ、勢ひ破竹の如くにて、入り亂れ、攻め戦ふ有様は、
 颯風砂を捲き、百雷岩を抜くことならず、甲斐の勢退けば、越
 の軍これを追ひ、越の軍退けば、甲斐の勢これを追ふ、大干「兵を
 合はすること十七度、中干「いづれを勝としらま弓、引くかと思え
 し信玄は、一手の勢の旗を伏せ、河をわたりてよしわしの、間を
 竊にしのばせて、崩し「勇み立ちたる謙信が、麾下近くすゝみより、

面もふらず切て入る、麾下の軍勢は、思はぬ兵に破られて、走る
 あとより甲斐の兵、鯨波をつくつて追ひかくる、宇佐美定行これ
 を見て、猛虎の如く憤り、憤馬を驅つて大音に、我が手の勢に下
 知をなし、敵の横合より、無二無三に突き入て、淵瀬もいとはず
 追ひおとす、信玄度を失なひて、流れを亂して走るところを、謙
 信たゞ一騎、赤栗毛の逞まじきに鞭をあて、大千「豎子何處まで逃
 ぐるぞと」、云ひも果さず斬りつくる、中干「信玄刀をぬくにいと
 まなく、軍配扇にて受けたれど、團扇は二つは折られたり」、
 降ると見て、傘とる暇も、なかりけり、

川中島の、ゆふだちの雨、

と謠ひし如く二の大刀は、中干「早肩先に斬り込みぬ、あつと云ふ
 間に信玄が、命は岩に碎かる、泡と消えなん危きを、救はんと
 して軍兵が、心は矢竹に勇めども 中干「水はやくして近寄せ、
 大將原大隅、中干「槍をのばして謙信を、突きはしたれど空づきし
 斯てはならじと槍をあげ、たゞ一打に打ちたりしに、馬にあたり
 て馬逸す、謙信駒をしづめんと、手綱かいぐるその隙に、信玄は、
 虎口をのがれ去りにけり、

鞭聲肅々夜渡河、

曉見千兵擁大牙、

遺恨十年磨一劍

流星光底逸長蛇

かく信立を、打ち洩したる謙信が、心の中は如何ならむ 切思ひ
やるだに哀れなり、信立は肩の痛手に堪えかねて、その夜のうちに
軍勢を、まとめて出る月影に、中干「道を求めてはる／＼と、我
が故郷に歸りけり、切我が故郷に歸りけり。」

○本 能 寺

麻と亂るゝ戰國の、人とし云へば誰もかも、馬を飼ひ兵を練り切
「糧を收めて、劍を磨す」、大干「頃は天正十年夏五月、徳川家康封せ

られ、安土城下に入りしかば、織田右大將信長は、いと鄭重に迎
へんと、直に惟任光秀に、饗應の役を命せらる、御請いたせし光
秀は、亂れたる世に心得し、都の手振見せばやと、さしも目出た
く勤めしを、小人輩の言により、中干「善美過分の評を受け、疑心
暗鬼は信長の、胸にやどりし時も時、羽柴秀吉中國より、援けの
兵を請ひしかば、中干「嚴命忽ち光秀の、首のうへにぞかゝりける」
光秀ひそかに思ふやう、人もあらんにこの我に、羽柴が命に従へ
とは、中干「あな情なの我君やと、齒齧をなして恨みしは、君に仕
ふる人臣の、よもある間敷事なれど、また信長を見るときは、右

大將とも仰がる、身に、中干「疎暴の舉動いと多く、或時は蘭丸を
 して、光秀の首に鐵扇を加へさせ、またある時は、好まぬ酒を殊
 更に、我意を通して勸めしめ、志賀の都の領地さへ、三年のうち
 には事なくも、奪ひ取られむ説を聞く、今又産を傾けて、新に來
 りし家康に、心盡しの饗應も、中干「琵琶湖の水の泡と消へ、おさ
 へし烙むらくと、もゆる思ひの光秀が、拳を握りて立ち上り、
 動く眼の間より、由々敷大事のはの見えしを、露ほど知らぬ信長
 は、諸將を安土に止め置き、親ら近臣百餘人、幸き從へて京都な
 る、切「本能寺にぞ入りにける」時こそ來たれと光秀は、田鶴も遊

ばぬ龜山に、從子光春等を召しよせて、積る怨みのかずくを、
 數ふるうちに光秀が、中干「眼は血汐ほとばしり、逆立髪は冠を
 つく勢を見てとりし、光春どもが百千度、諫むる言葉も聞かばこ
 そ、推て謀叛に加盟させ、暴戻無道の殺逆をば切「企てしこそ淺
 ましけれ」、かくて士卒を打ち揃へ、中國勢を援けんと、僞り向
 ふ大江山、心の駒も鳥羽玉の、暗路をいそぐばかりにて、さしも
 忠義の光秀が、追ひく年も老阪の、如何なる道にや迷ひけん 中
 干「無念至極の胸のうち、亂れて濁る桂川、渡らん駒の足なみは
 中干「東としてぞ進みける、

本能寺溝深幾尺、
糠糟在手交糠食、
老阪西去備中道、
我敵正在本能寺、

我成大事在今夕、
四檐梅雨天如墨、
揚鞭東指天猶早、
敵在備中汝能備、

こゝに始めて軍勢は、中干「漸く二た心と悟りしが、捨つる命は一つぞと、時しも六月二日の朝まだき、露の身軽き軍兵が、本能寺をとり圍み 中干「圍をつくりてぞ攻め入りける、この物音に信長は寢覺の耳を聳立つれば 中干「紛ふ方なき人馬の聲、館間近く聞ゆるに、枕を蹴て立ち上り、疾く見届けよとありければ、森蘭丸

かしこまり、表の方に走り出で、見越の松に片手をかけ、右手をかざして見てあれば、雲か霞に白旗に、染めたる桔梗の紋どころ崩「見るより蘭丸引きかへし、光秀謀叛と答ふるに、赫と怒りて信長は、者共覺悟と呼ばはりて、弓矢おつとり立ち向ひ、寄せ来る敵を物ともせず、またしくひまに數十騎を、矢継ぎ早に射て落し、勢ひ鋭く防ぎしも、たい一と筋と信長が、頼む弓弦ふツツと切れ、得たりと突き入る豪敵を、すかさず弓もて打つて伏せ、兎角するうち信長も、左手の腕に痛手を負ひ、蘭丸代つて拒ぐうち宿直の者もことごとく、命を的に戦へど、衆寡敵せず信長は 大干

「最早これまでとや思ひけむ」中干「自から館に火を放ち、煙のなかに飛入て、及に伏してぞ果にける。吟替「嗚呼豪邁の信長が、空をも蓋はん大鵬の、圖南の翼中空に、燕雀のために惱まされ、終世望み絶へたるは、獅子身中の虫に倒れたる、そしりを受けて人皆の、口にくるも悼まじき、續いて蘭丸を始めとし、坊丸力丸の小姓ども、また若木の櫻花、嵐の山の朝風に、いとも床しき香をとめて 中干「散るやちり／＼あとやさき、百有餘人もろともに哀れ本能寺の、切「朝の煙りと消へにける

研ぎ得たる、心ゆるすな、増す鏡

思はぬちりの、かゝる世の中、

つら／＼古今を按ずるに、人に君たる王侯の心すべきは徳にこそ切「心すべきは徳にこそ。

○森 蘭 丸

頃しも天正十年の、水無月二日の東雲に、怪や遙に人馬の音、おどろ／＼と響きつゝ、這方に近づく体なるに、切「信長心訝りて大干「誰かあるぞと聲高く、召させ給へば次の間に、控へたりける森蘭丸、森蘭丸候ふと、申せば信長領きて、聞かずや何やら物騒が

しく、必ず軍兵なるべけれ、見届来よと命ずるに、蘭丸はつと畏
まり 中干「刀手挟み手燭持ち、突と椽側に走出、四方を佞と見遣
れども、まだ明やらぬ事なれば、四方は猶も微闇く、眼にかゝる
物とては、星諸共に池水に、映る螢の影ばかり、旭に逢はば露自
物、消えなん魂の儚と、中干「是も知らずか杜鵑、血をや泣くらん
一聲は、同じ思に啼くぞとも、知らぬか佛凡夫身、心もいまだ東
の間に、早物音は近々と、來れる如く響くにぞ、蘭丸得堪へず聲
を揚げ、物噪がしき何事ぞ、大干「茲には武將も在するを、憚から
ざるや知らざるや、緩怠なりと罵りつ、かたへに手燭投捨て、

觀樓の上に馳上り、彼方を透眺れば、實にも許多の軍兵、潮の湧
く如く、早や門外に寄來たる、旗の記章は水色に、白の桔梗の紋
を附す、中干「さては謀叛の頭人は、惟任日向よ光秀よ、こは淺ま
しとばかりにて、其儘觀樓を飛下り、奥の間指して馳入れば、信
長公は立迎へ、やよや蘭丸慌し、見届来しかと宣ふを、蘭丸聞も
終らず、崩「一只今寄せたる軍兵は、惟任日向の手なりけり、早込
入るに間もあらず、御心せさせ給ひよと、申もあへず緇梅の、素
袍の長袖かなぐりて、背の方に引結び、股立高く取上て、唐紙戸
障子打ちたつき、力足にて板敷を、碎くるばかり踏鳴らし、天地

に響けと聲高く、宿直の面々起候へ、逆臣惟任日向守、御前近く
寄せたるぞ、防げくと呼子鳥、罫を出でし儘にして、粧としては
無けれども、是れ天成の美少年、齡は二十越えながら、美しけれ
ば人目には、猶年わかの浦風や、吹や一夜の夜嵐に、敢へなく露
と消え果て、切「名を本能寺に残しける、君が心の健氣さは、今
も語りて諸共に、あな勇しき若者と、ほめたへぬはなかりけり
切「賞たへぬはなかりけり。

○太田道灌

頃ハ彌生の末つ方、嘶なく駒に置かせ、士卒引きつれ道灌は切
「狩野にこそは出にける、大干「勇む春駒鳴く雲雀」、中干「影はい
づこに遠近の、たつきも知らぬ原中に、士卒にはぐれ道灌は、一
人さまよひ居たりけり」、折しも降り来る春雨に、心せかれて道灌
は、駒の手綱を搔繰りつ、一と驟高く彼方なる、切「賤が家を指し
て進まる」と訪ふは嵐か松風か、誰まつ風に琴の音ぞ、通ふ調の
ゆかしさに、駒をどめさせ道灌は、門をたさきて簑一領、中干「借
らんとこそは乞ひにける、何を語らむ佐保姫の、一枝の花に物語せ
露も溢れむ山吹を、畏くも捧げつ、いとも恥ぢらふ其様は、

道灌その意を悟り得ず、訝かしながら山吹を、切△△△△△△△△翳して遂に歸りけり、

孤鞍衝雨叩茅茨、

少女爲贈花一枝、

少女不言花不語、

英雄心緒亂如絲、

城に歸りて道灌は、近侍を招ぎ問はせしに、近侍の答へ申すやうそは古歌の意をかりて、簑なきを花によそへて、答へしなりとて一首の歌を詠じけり、

七重八重、花は咲けども、山吹の

みの一つだに、なきを悲しき、

斯く云々と事の由、具さに申し上げしかば、道灌いと愧らひていざこれよりは山狩を、やめて詩歌を學ばんと、切△△△△△△△△終に詩歌に秀でたり、されば人々心せよ、おのが業にと鞭うちて、學びの道に勵みなば、如何なる業かならざらむ、勉めよ勵めよ國のため、切△△△△△△△△勉めよ勵めよ國のため。

○毒 饅 頭

笑へば子女も懐かしみ、怒れば虎を恐れしむ、英邁偉絶の豪勇も切△△△△△△△△「まかせぬものは涙なり」、大干△△△△△△△△「こゝに加藤肥後守清正は、中干△△△△△△△△

知遇の恩に身を捨て、四百餘州を我が駒の、蹄に蹴らんと勇み
しも、覺て果敢なき夢なれや、哀れ太閤世を去りて、世繼の君は幼
なし、石田小西の小人等、必らず事を過またず、一度は死するこ
の身體、中干「捨て甲斐ある時や來む、されど仁義の深き家康に、
心の弓も引きさされず、さりとして幼君も捨てられず、心は二つに身
は一つ、流石鬼神の清正も、困じ果てぞ居たりける、これより先
に京都なる、二條の城に幼君が、成らせられたるその時に、御供
なせし清正に、豊國神社の御供物と、いふて饗應す毒饅頭、毒ど
は知れど家康の股肱の臣の澁川は、それとは知らずで己れまづ、毒

見をなして勤めける、其真心をいなるみかね、一つを取りて味はへ
ば、身體は日々に衰弱し、とても餘命は永からじ、命あるうち今
一度、最後の御目見たまはりて、歸國の御暇願はんと片桐市之丞
且元と、共に出仕をなしにける、今年漸く御七歳、淀君附き添ひ
出まして、太閤殿の果敢なくも、御他界ありし其後は、頼みまつた
る御身まで、歸國をなすは家康の、威に恐れてのことなるか、但
しは外に望ありてかと、恨をふくむ一言に、清正伏して申すやう
朝鮮までも武名をば、轟かしたる成れの果、いかでか恐れ申すべ
き、且つ又外に望のなき身體、家康公と申し奉つるは、仁義に富

める御大將、無道の事はなされまじ、千に一つもなされなば、大阪城の鐵壁に、劣らぬ程の且元あり、老ひたりとてこの清正、他事に見過し申さんや、第一番に驅けつけて、敵を蹄に馳け散し、御心安め申さんと、いと頼もしき言上に、歸國の願許されぬ、大千「烈帛一聲不如歸と叫ぶ中干」山時鳥血に鳴くも、我が身の上と清正は、心に思ひあきらめて、秀頼公に打ち向ひ、この清正の亡き後は、たゞ且元の諫言を、心寛くも容れられて、徳川殿を父君と思ひ給ひて關東に、必ず弓をひかせ給ふなど、いと怒るに申上ぐれば、吟替「秀頼公は聞し召し、爺の言葉は守れども、疾の爲め

に歸國せば、最早こゝへは參らぬか、疾つのならば自らが看護をなしてつかはさん、國に待つものあるならば、そを呼びよせと仰せける、鬼神をあざむく清正も、御側に侍ふ且元も、聞居たまひし淀君も、胸を張り裂く思ひにて、皆一同に伏し泣きぬ、果しなければ清正は、心を鬼にとり直し、御暇申し出でければ、秀頼公は立たせられ、吟替「爺よくと迹を追ひ、袖を引きて泣きたまふ、猛虎を挫ぐ清正も、幼き御子の腕には、引れて元の座にかへり、秀頼公を抱き上げ、つくづく顔を見上げける、頑是なき秀頼公、うるむ目もとに清正の、髻にすがりて別れをば、惜み給ふぞいぢ

らしき、やがて御所持の中啓を、かたみにとらせ遣すと、下した
まへば清正は、切一聲も得たてず伏し拜む、嗚呼幼君がかほどまで
慕ひ給ふも清正が、無二の心の誠實より、現れ出づる光にて、君
に仕ふる人臣は、斯くありてしものと思ふなり、切かくありてし
ものと思ふなり。

○櫻

狩

霞たなびく山々の、さかりの花を眺めんと、いなしく駒に鞍をか
せ、東雲近く浅茅生の、切芝の庵をたひひとり、大千「時はなれ

し鶯の、聲を聞きつゝ、春の野に、萌ゆる草葉の露わけて、進むる駒
のたてがみに、亂れかゝれる青柳の、糸を傳ふて朝風に、吹くとも
なしに床し香を、送りて我を誘ふかと、思ふばかりに遠近の、中
干「梢は雪か白雲か、景色妙なる其まは、浮世の善悪も打ちわ
すれ、しばし木蔭に立ちよりて、矢立の聲をと、いはず、

薄命能伸旬日壽
零丁借宿平忠度
志賀浦荒翻三暖雪
南朝天子今何在

納言姓字胃斯花
吟詠恨風源義家
奈良都古簇三香霞
欲望三芳山路更賒

と書きついでけたる水蒸を、跡に残して花の香を、風のまに〜飛
くれば、此處は盛りを早や過て、散りしく花は野に畑に、中干「飛
び交ふ蝶のごとくなり、吟替「嗚呼世の中は鳥羽玉の、夢かうつ
か昨日まで、榮えしもの、今は早や、見る影もなくなり果て、
うき世の中とかこちつ、今更それと夕ぐれ、鐘の音さへ身に
しみて、昔をしのぶ人もあらむ、さはさりながら花の木も、また
來む春にめぐり合ひ、貧しき人も何時までか、中干「時めく時のな
からめや、榮枯盛衰は世の習ひ、たゞ玉鐙の道理を、切「たどらむ
外はなかりけり、いざ歸らんと騎る駒の、手綱かひぐる其袖に、

花の吹雪はかゝりけり、切「花の吹雪はかゝりけり。

○國 船

雲に聳ゆる高山も、登らばなどか越えざらん。空を浸せる海原、
切「渡らば終に渡るべし、大千「我秋津洲は茜さす、東の海の離れ島
例へば海の只中に、浮べる船にさも似たり、二萬方里の船の中も
四千餘萬の乗組あり、船の主の指揮を受け、大千「文明海に進み行
く、水師楫取多かるに、我等も楫取の一人なり、船の行手は和田
の原、八重の潮路の遠ければ、颶風逆捲く時もあり、切「高浪荒る

る時もあり、船子の業を習はずば、颶風高浪凌ぎ得で、切「思ふ港
にいかで着くべき。」

○王 昭 君

問はずがたり、誰れに聞とか打ちわぶる、身の憂さを知れ、山時
鳥軒の草、忍ぶとすれど秋ふけて、切「よわりはてたる蟲と我れか
な」大干「夫れ一生の別れには、露の命も惜しからん、風にまか
する窓の燈火、悲しみ骨髓に徹り来て、形は憔悴と衰へて、た
何事も妹背の契り淺衣の、薄き縁となり果て、哀れ果敢なき我身

かな、一度君に別れては、遂に相逢ふこともなし、隔つくせし。
千山萬水の雲終夜、心にかけて思へども、君に逢ふ夜の夢にだも
見ぬ、今世の中に物おもふ身は、我ばかりと思へども、中干「また
昔を傳へ聞くときは、王昭君のその古は、漢の帝の美人にて、御
寵愛は類ひなし、殿上にも雙びなく、誠に雲の上人にて、流石ゆ
ゆしくおはせしが、如何なる人の讒言にや、胡國といへる遠國の
夷の在所に、切「流されたまふぞあはれなり、されば王昭君は今
はや、住みなれし花の都を、切「涙とともに立ち出づる、吟替「ある
時は船に召され、又ある時はことに嶮しき山を越え、あまり我が

身の悲しさに、駒の上にて琵琶を弾じ、古郷戀しき歌の曲、さま
く朗詠したまへば、風情水音皆ことごとく腸をたつとかや、帝
も今は聞しめし、御愁嘆の御事にて、忝けなくも龍顔に、御涙を
浮かばせ給ふぞ有難や、されど又綸言汗の如くにて、再び召し返
へさるゝ沙汰もなし、かれは唐土これは我が朝また胡國夷の朝に
春は葦屋の夜の雨、乾坤萬里と隔てれど、物思ふ身は異ならず、
流れもおなじ水なれと、切「淵瀬とかはるが如くなり」たゞ何事も
杜鵑、血に啼ひて何ぞ、腸を断つとかや、しばし口を結んで三春
を、切「過ごさんにはよしなかりける。」

○老 蘇 の 森

數ならぬ、身さへ年の積るかな、老ひ人をも嫌はざりけりと、大
干「うたひ置かれし言の葉も、中干「今身の上」に知られけり、され
ばこの世に生れ来て、生老病死の四つの苦は、逃がるゝ人として更
になし、このまた四つの苦のうち、何れ差別はなけれども、中
にも老苦が哀れなり、天のことを我が身になして、思ひやるだに
古は、容顔美顔の姿して、月や花や人にも見られ、假そめの道
雪降に、花を贈られて、文玉章をとりかはす、傘のはづれのあひ

まより、人を見初むる目もとまで、嗚呼耻かしやと思ひしことも
 切「夢か」とさめてぞ昔なり」たゞ人間の衰ゆる、姿見るたび悔し
 さに、年はいと増鏡、涙にもるゝ哀れさを、吟替「詩にも歌にも
 いるさるゝ、緑髪佳麗一夢の中、さらば古き歌にも詠まれたり、
 昨日乗りて遊びし竹の駒、今日は早や老の阪、行く杖とたのまん
 ばかり、うつる鏡の影を見るたびに、老蘇の森の嘆をぞする、と
 つらね置れし言の葉が、中干「いま身の上に知られたり、唯人間の
 この世にあるは假寝の、切「夢か現の間なり。」

○迷悟も

世の中は、迷ふが故に三界は暗し、一心ざとれば、十方世界にひ
 ろくして、地獄の餓鬼も我にあり、切「彌陀の浄土も他にあらず、
 大千、佛とは何を岩間の苔衣」たゞそのまゝの姿にて、慈悲より
 ほかに心なし」諸事何事も腹立つとも、言葉は残せ、言葉少なく
 純直にして、濁る心を速かに、誰も人には情われ、慈悲は人の爲
 めならず、廻りくつて小車の、中干「後は我身に報ひ来る、されば
 古人の言葉にも、聖人は人に誇らず、大海は塵をえらばず、中干「
 仁者に敵なしとかや、枝高きとて風には脆く、仇折れぞする、憎
 まるる人には尙よくしなへ見よ、後は深き友となる、善悪は友に

こそよる、わが好きに人の悪しきはなきものよ、友は鏡となるものぞかし、唯何事も悪しき心を捨てて見よ、切何國の里にも住みよかるべし、皆人は我智我慢我力我心を拂ひすて、彌陀頼む心は西へ空蟬の、切もぬけ果てたる身こそ安けれ。

○武藏野

武藏野に、草はいろく多けれど、摘菜とすれば扱もなし、皆人は若き時より、切只徒らに日を送り、大千才智藝能なき人は、寶の山に入りながら、空しく歸るが如くなり、たましく人間界に

生れ来て、真如の玉を磨かすば、中干一人と生れし甲斐ぞなき、また何時の時に磨くべき、頼まれぬ世にもあるかな月嶺、そよぐ草葉の霧の身なれども、大千例令高位長者の身となりて、中干七珍萬寶満ちて、榮華に驕る樂みも、切一と夜の夢の如くなり、歡樂さはまりて哀情多し、古人の文にも記されたり、さればにや生々世々の樂みを、心の中に月や花、中干これを樂しむ人もなし、大千會者定離生者必滅の世の習ひ、春さり秋は蟬の聲、扱も果敢なき浮世かな、世の中を思へば夢か稻妻の、ちらとする間の語らひに、中干慳貪愚痴は迷ひなり、あゝ引寄せて、結べば草の

庵にて、切「解くればもとの野原なり、少きを、足れりとも知れ満ちぬれば、月も程なく缺て行く、十六夜の空や、切人の身の上と知られけり。

○送 別

昔さす、我が日の本に人といふ、人の中より擇まれて、海原遠く浦々の、浪の花さく異國に、渡りゆくなる君が名と、切「譽れば世世にのこるらむ、大千「こゝに船出を祝はんと、心をこめて足曳の山にも狩り得海につり、川に漁り野にもとめ、猶かきたらで風を

裂き、麟を屠りて盃を、進むるうちに傍より、吟する聲の高からかに、

渭城長雨濕輕塵、客舍青青柳色新、
勸君更盡一杯酒、西出陽關無故人、

古の調べの唐詩に、思をよせて別るれば、惜む心も懐かしく、皆とりくに又酒を切「すゝめて興をぞ添へにける、暫くありて一同に、杯さっげ起立して、君萬歳を唱へけり、切「君萬歳をとなへけり。

○松 囃 (新玉)

新玉の、年立かへる春の日に、君が齡は千歳ふる、松嘯とて數ならぬ、我等ごとまもゆるされて、切「聞くもなかく面白や」、大千「鼓は四海浪の音、中干「笛は龍王の吟する聲、名も高砂の尉と姥」これぞつきせぬ妹と脊や、神の御前は鈴鹿山、悪魔を拂ふのみならず、弓矢の響のこされり、田村麿の御威勢は、中干「今が世までも譲る葉の、注連引きまはす筒井より、汲めどつきせぬ若水は、老を養なふ便りとかや、さて其の次は春の花、都に聞えし、三條の古鍛冶宗近は、心正直にして神慮に叶ひし、名刀を造り出して、今太平の御代となり、切「古き詩にもあるぞかし、長生殿の内

には春秋に富み、不老門の前には、日月遅しと申せしが、その心を學ばれて、今彼の御代と云ふ告の、大千「とりくなれや梓弓」、矢竹心の一つなり、また英雄の交りは、中干「頼みある中の酒宴かな」。

○蓬 萊 山

目出度やな、君が惠みは久方の、光り長閑き春の日に、不老門を立ち出て、切「四方の景色を眺むれば」、大千「峰の小松に雛鶴棲みて」、中干「谷の小川に龜あそぶ、千代に八千代にさるれ石の、巖と

なりて苦の蒸すまでと命ながらへ、雨土ぐれを破らじ、風枝を鳴
さじと云へば、中干「また堯舜の御代もかくあらん、かほど治まる
御代なれば、千草萬木五穀成就して、大千「上には金殿樓閣の甍を
ならべ、中干「下には民のかまどの賑しくして、仁義正しき御代な
れば、蓬萊山とはこれとかや」君が代の千歳の松も常磐色、變ら
ぬ御代のためしにて、天長地久と、國も豊に治まりて、弓は袋に
大千「劍は箱に納め置く」、諫鼓苦深くして、鳥もなかく、中干「
驚ろく様ぞなかりける」、

○小 敦 盛 (初段)

祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響きあり、沙羅雙樹の花の色 盛
者必滅の理を現はす、驕れる者は久しからず、貴とさ人も 切「終
に亡ぶる習あり」、大千「されば此の度源氏平家の戦ひに」、中干「平
家方一族母衣大將の其中に、物の哀れを止めしは、無官の太夫敦
盛にて 切「諸事の衰れを止めたり」、大千「敦盛其日の打扮は、何時
に勝れて華やかに、先づ肌よりは、梅の匂ひの肌寄せに、唐紅を
召されたり、練絹に色々の絲を以て、秋の草盡しを縫出したる直
垂に、弓手の手使ひ両面の脛當に、萌黄緞しの鎧着て、鍬形打ち
たる兜の緒をしめ、鎌倉作りの太刀を佩かせ、二十四差したる染

羽の矢を負ひ、塗籠藤の弓を持ち、連錢草毛なる駒に、梨地の蒔繪したる、白覆輪の鞍置かせ、御身輕げに召されしは、中干「勇ましく見えにける、御一門主従の御供を召され、濱に下らせ給ひしが御運の末の悲しさは、御父經盛卿より譲り給ひし、さえた」と云へる漢竹の、葉笛を内裡に忘れ給ひしが、若君様の悲しさは捨て、も御出あるならば、中干「斯程の事はあるまじに、彼の笛を忘れ置くこと、敦盛末代の恥辱と思召し、取りに歸らせ給ひしが筒様に時刻を移す其暇に、御一門の御座船も兵船も、中干「遙の沖に押し出だす、痛はしや、敦盛も詮方なく旗屋の方を心がけ、駒

に任せて落ちさせ給ふ、切「心の中こそ哀れなれ、大干「これは扱置きこゝに又、武藏の國の住人、熊谷次郎直實は、此度一の谷の先陣を承はれど、未ださまで功名もなき故に、天晴勇士の通れかし。良き大將もあらば引組で、功名せばやと思ふ折節、遙に敦盛を目にかけて、駒引き寄せ打ち來たりて濱邊を指して急がる、直實やがて大音あげて、中干「夫れに落ちさせ給ふは、平家方にても良き大將と見奉る、斯く申す某は、武藏國の篠黨の旗頭、熊谷次郎直實と申す者なり、源氏方にても隠れなき敵に候かし、正しく敵に後方を見せたまふやな、引き返して御勝負候へ、見參せんと

大千「扇をあげて招かる。」中干「痛はしや敦盛は、熊谷とは聞きながら、更に耳にも聞入れず、落つる味方の兵船を心がけ、駒を早めて急がる。」さる程に敦盛達の沖を御覽するに、御座船間近く寄せければ、斜ならず悦び、腰より日の丸の扇を出し、中干「沖なる船を招かせたまへば、船中の人々の其中に、門脇殿御覽じて伊賀の平内基國を御側に召され、如何に基國あれを見よ、母衣掛武者の船を招くは、左馬頭行盛か、又は無官の太夫敦盛か、中干「孰れも見よとの御誕なり、悪七兵衛景清承まはり、某見定め申さんと、白柄の薙刀おつ取杖につき、船端につと立ち上り、兜を傾

け磯邊の方をつくぐと打ち守り、嗚呼痛はしの御事や、何とて御座船に召し後れさせ給ひしやな、参議經盛卿の御子息、無官の太夫敦盛卿にて渡らせたまふ、御馬の毛色、鎧の袖印に至るまで中干「違ふ所は在まらず、あゝ痛はしやと申上ぐれば、門脇殿の聞き召し、敦盛ならばこの船を、中干「磯邊に寄せとの御誕なり、水主楫取かしまり、俄に櫂楫を取り直し、船を磯邊に寄せんとすれど、この内より吹き續きたる北風の烈しきに、名残の波は今日もたち、風は競ひて、中干「浪は香車の如くなり、白波世界を發き、真砂を天に揚ければ、中干「宛然雪の山の如くなり、小船なら

ば自ら、弓手妻手にも押し廻さるゝものなるに、殊に勝れし大船に、しかも大勢台されたり、次第く何れとも、逆捲く浪にせかれつゝ、中干「磯邊に寄すべき様はさらになし、敦盛この有様を見て、最早叶ふまじ、駒を泳せ、船に乗らんと思召し、崩し「駒の手綱を搔繰つて、海中へ颯と駈け入り、浮きつ一反ばかり出でたりしが、駒逸物とは申せども、逆捲浪にせかれつゝ、泳ぎ兼てぞ見えにける、熊谷この由見るよりも、大音揚げて呼はる様、大干「如何に平家方の御大將、御座船遙に程を隔てたり、しかも浪風烈しくして、よもや逃れさせ給ふまじ、崩し「引返し御勝負候へ、若

しも返へり給はぬものならば、某が中指を射てまゐらせんと、弓と矢を打ち番ひ、大干「そぞろに引いて掛りける、敦盛駒を引止め此處を逃がれんとせしに、斯く運の極まる上は、若も熊谷の鏑矢に射止めらるゝならば、中干「平家末代の耻辱と思召され、いざこの處に勝負を決せんと、相圖をなして駒の手綱を引きかへし、海中より颯と駈け上り、羽染の鏑矢打ち番ひ、かくと詠じたまひける、

梓弓、矢をさし分けて、引く時は、

返へす心を知るか、そも君。

と遊ばし給へば熊谷も、心ある弓取なれば、はつと胸にこたへ、
双の鎧を蹴張りつゝ、

いたつきの、はやはづれんと、思ひしに、

矢といふ聲に、たちぞとらまる。

と返歌をなして、切心静かに待ちにけり、

○小 敦 盛 (二段)

さる程に、敦盛やがて打ち物の鞘を外し、崩レ熊谷に打てかゝれ
ば、直實しつかと受け留め、追ひつ追はれつ、受けつ流しつ、こ

こを先途と火花を散らして、二騎並んで面もふらず切り結ぶ、未
だ勝負も見えざるに、敦盛いざや組まんと、打ち物彼處へ投げ捨
て快く近寄り、直實ともに打ち物かつばと投げ捨て、快く駆け寄
りて馬上ながらにむづと組み、互にかはす聲のうち、一度に鎧を
踏みはづし、兩馬が間にドツと落ち、大千上を下へと返しける
痛はしや敦盛は、心は猛く勇めども、剛氣の熊谷、物の數とも思
はねば、敦盛を心易く取て押へ、首を搔むとし給へど、餘り手弱
く思ひ、差し俯いて御相恰を見奉るに、薄化粧に鐵漿黒の有様は
殿上人の年の頃、十四五ばかりと打見えて、容顔殊に麗はしく、

熊谷餘りの痛はしさに、少し打寛るげ參らせ、扱は平家方にては如何なる公達に渡らせ給ふやな、御苗字を、中干「名乗らせ給へどありければ、敦盛は熊谷に、組み敷かれ、世にも苦しき息をつきさては中々に武藏の國の熊谷は、文武二道の勇士と聞きつるに、中干「何とて合戦に法なきことを宣ふやな、我は天下の朝臣として、雲閣の座に連なり、詩歌管絃の身には長じたりし身なれどもこの三歳がうちは一門の運のつき、いとわこがれ亡びしより、武士の勇める法をあらく承はるに、大千「夫れ武士の名を名乗るといふは」中干「互の陣に群りて、胡篠箆を腰につけ、互に打ち物

扱き持ちて、我は何處の何某と名乗りてこそ、勝負は致すなれ、只今敵に組敷かれ、下より名乗るといふことは、中干「今こそ初めて承はる、熊谷とありければ、直實聞いて、仰はさなれど、御苗字をあらはし首をとり、この直實が譽を、現さん爲と云へば、敦盛聞し召され、夫れは隠れもあるまじ、たい某が首をとり、御邊の主の義經に見せたまへ、若し義經見知らずば、蒲の冠者に見せたまへ、蒲の冠者も見知らずば、このたび平家方より、中干「生捕の者も多かるべし、彼の者ともに打ち向ひ、誰が首とも分らずばその時こそ名もなき者の首ぞと思ひ、中干「たい叢へ捨て給へ、さ

のみ物を尋ぬるやな、熊谷とありければ、直實承はり、扱は武士の勇める法を、委しく知ろし召されしよな、世に物憂き者は我等にて候、君の仰せに従ひ、御首とらんとすれば、中干「親と合戦子と争ひ、花の下なる半日の影、風の前なる一夜の燈、清風朗月飛花落葉の如し、此の度の合戦に、熊谷の参り合ふことも、前世の宿縁と思召し、御名を名乗らせ給へ、たい奉公のその中に、後世を吊ひ申すべしとありければ、敦盛は、名は何時まで名乗るまじと思へども、後世を吊はん嬉しさに、いかに熊谷、大干「我を誰ぞと思ふらむ、中干「我こそは、柏原親王九代の後胤、門脇が二

男、参議義経が末子、無官とは假名にて、太夫敦盛とは某なり、今年歳は十六歳、軍は今日が始めなり、早や首とれや熊谷と宣へば、直實泪を流し、扱は経盛卿の御子息、無官の方にて渡らせ給ふやな、某が一子小次郎直家も、今年歳は十六歳、さては御同年にてましましたせしや、直家もこの度、一の谷の戦ひに魁け致し、弓手の腕に矢を射られ、某に打ち向ひ、この矢抜いて給はれと申せしに、敵と味方の其の中で、餘り心弱しと思ひ、中干「如何に直家、若しも其手が深創ならば、駒より下りて自害せよ、薄創ならば敵と引き組んで打死いたせ、篠黨の名を汚すなど、じつと睨みしが

其の時某が方を一と目見て、敵の陣所に駈け入るを、後姿を見
しばかり、中干「今二た目とは見えざりけり、吟替この直實がつれ
なき命ながらへて、武藏にかへり直家が討死と聞かば、誠に母が
歎くべし、況してや經盛卿の御子息、今日まで華やかに染めたる
若君を、磯邊に一人御殘し、さぞや歎かせ給ふべし、この君一人
討ち奉り、直實が恩賞に預かればとて、千歳の齡は保つまじ、未
代までの物語りに助けばやと思ひ、如何に若君、平家方に御歸り
て武藏國の熊谷と引組で候ひしが、我が子の小次郎に思ひかへ、
助けまゐらせ候と、御父經盛卿によく御物語り候へと、云ふ

より早く引き立て、鎧につきたる塵打ち拂ひに打ち乗らせ奉り
直實もともに駒に打乗り、四五町ばかりは見送りしが、崩「後の
山に鬨の聲、誰人ならんと見返せば、弓手の方には森田平山控へ
たり、右手の方には虎江殿、ついで佐々木四ツ目の紋の旗をお
したてて、上の山には御大將九郎判官源義經、白旗を靡かせたま
ひ、御膝もとは武藏坊辨慶、相摸龜井片岡伊勢駿河、源氏の
族聲々に、武藏の國の熊谷は、敵と引組んで候ひしが、すでに
組敷置ながら助くるは、必定逆臣とおぼへたり、二心ならば熊
谷を先に打ちとれと、聲かけられて直實は詮方なく、大干「またも

扇を揚げて招きよせ、中干「如何に若君あれを御覺候へ、いかにもして助け參らせ度は候へども、珠方の軍勢雲霞の如くに満ちたり、よもや逃れさせ給ふまじ、この直實が手にかけ奉り、後世を弔らひ申すべしとありければ、敦盛涙を流し給ひ、ことを逃れ行く先にて、中干「賤き者の手にかゝり、面を晒さんも無念なり、箇程義理ある武士の手にかゝり、討たるものならば、恨むところ更になし、早や首とれや熊谷と、西に向つて手を合せ、中干「覺悟極めて在しける、心も亂れ氣も亂れ、何處に太刀を當つべくとも覺えず、たい途方にくれて居たりしが、檜番所の前なれば、直

實是非に及ばず、敦盛の花の首を、中干「水も溜らず打ち落す」中干「さしも剛なる直實も、暫しが程は心も亂れ氣も消えて、その儘屍體に抱きつき、濱に打ち伏し泣き叫ぶ、弓矢とる身の哀れにや漸く心とり直し、御死體を引き立て見るに、弓手の方には巻物一卷さゝられたり、妻手の脇には、漢竹の笛に扇を添へてさゝられたり其の巻物を披き見るに、このたび都出の事は委しく書き記したりさて敦盛の御死骸を葬り奉り、御首笛巻物扇を取りあげ、駒引き寄せ打騎りて、中干「大音あげて呼ばはるやう、平家方の一族母衣太將無官の太夫敦盛を、武藏國の住人、篠黨の旗頭、熊谷次郎直

實が討取つたりと、凱歌を挫とあげ、陣所をさして引て行く、やがて敦盛の首を、義經公御實檢ありて後、直實に賜はる、直實首を押し戴き、弓の弦ふつと切り、太刀はもとより弓矢を捨て、警切つて武士をすて、鎧の袖を墨に染め、新黒谷に引きこもり、法念上人の弟子となり、其の名も蓮生法師と様をかへ、三歳が程は夜もすがら、法華經百萬遍を唱へ、切「敦盛の追善を營みける、これも敦盛御最後のときに、一言の言葉のかはし、また熊谷も武士の情、中干「何と聞て唱へても、憂は世の中義理は熊谷、物の哀れをといめしは、無官の太夫敦盛に、蓮生法師の後の歎きたて切

「諸事の哀れを止めたり。

○那 須 與 市

四國八島の荒磯の濱にて、源氏平家の戦ひに、源氏方弓矢の譽れ切「今の世迄も残さるる」大干「さもあれば平家方より、冲なる船に、扇を的に立てければ、中干「義經公御覽候ひて、數多の方を御前に召され、如何に方々彼れを見よ、平家方より冲なる船に、扇を的に立てければ、兎にも角にも彼の的、射らでは叶ふまじと宣まへど、冲にたちたる的なれば、誰こそ御請致す者もなし、爰に下

野の國の住人、大千那須の興市宗高は、青年こゝに十九歳、其の
頃名を得たる弓取なれば、義經公宗高を御前に召され、如何に興
市、あの扇を射よと宣へば、興市承まはり、再三辭退申上ければ
義經公怒て申さるゝやう、この度鎌倉をたち出で、西國へ向はん
づる人々は、皆義經が下知に背くべからず、この仔細を存せぬも
のは直に鎌倉へ歸るべしと宣へば、興市今は辭するに言葉なく、
御請いたして御前を下りける 中干一されば宗高其日の打装は、常
にすぐれて華やかに、緋緘の鎧着て、鍔形打ちたる五枚甲の緒を
しめ、白檀磨きの脛當に、兵庫鎖の小手を貫き、小金作りの太刀

を佩き、年は五歳の眞黒毛の名馬、梨地の鞍を置き、響明鎖紫手
綱、霧降りの矢を持ちて、波打つ際に驅け出で、沖なる船を見渡
せば、間ひ二丁計りと打ち見えて、名残の浪は音高く、風は競ふ
て浪は小車の如くなり、的は定まらず 切射るに射られぬ次第な
り、然れど又武士の、御請いたせし上からは、兎にも角にも彼の
的、射うでは叶ふまじと、小松原へを駆け上り、駒より飛び下り
兜を脱ぎ、那須八幡を伏し拜み、若しも某 吟替 七十五迄の命
ならば、六十五迄、六十五迄の命ならば、五十五迄、五十五迄の
命ならば、四十五までに身命を締め、何卒彼の的を射らせ給へか

しど、深く祈願を申しける、やがて那須八幡聞し召し、二つともなき生命に引替て、祈る心の不憫ぞと、されば十二方の的一筋にうち守れよとの御宣託ありければ、あな有難や宗高は、崩し「駒引寄せ打ち乗りて、小松原を駆け降り、駒の手綱を手繰りつゝ、海中へ颯と馳せ入りて浮きつ沈みつ一段ばかり乗り出せしが、駒逸物とは申せども、逆捲く浪に堰かれつゝ、泳ぎかねてぞ見えにける、斯くては叶ふべからずと、矢頭は少し遠けれど、弓と矢うち違ひ、矢聲をかけて放てるに誤たず、願の功力の御威光かな、扇の要ふツつと射切り、中干「扇は空中に舞ひ振り、海中へさつと落

ちければ、平家方船を叩き、陸には源氏轡を駢べ、船を叩ひてぞ感じける、痛はしや平家方敗軍と極まりて、西國指して落ちて行く、切「心のうちこそ不憫なれ、宗高が功名は數多あれど、斯程の功名は始めにて、其名を末代に輝す、切「源氏の御代こそ芽出度けれ。

○俊 寛 (上段)

あだまもる、筑紫のはての薩摩瀉、鬼界が島の荒磯に、治承元年夏五月、流され給ひし人々は、右近衛の少將成経、檢非違使平入道康頼、法勝寺の執行、切「俊寛僧都の三人なり、大干「憂き艱難を

この島に、中干「送り給ふ其の中に、大救の命を傳へらる」思ひかけぬ事なれば、あら有り難き御誕やと、三人等しく膝づき、恭しくも命状を、押し頂きて成経は、嬉しき涙に袖濡て、中干「聲も震へてさらりと、讀み得給はぬ有様を、康頼とりて漸々に、讀み上給ふ趣は、大干「この度中宮御産の御祈禱に、中干「非常の大救行なはるるに依り、鬼界ヶ島の流人の中、成経康頼を救免すと、讀み給ふと、俊寛は、あつと驚き頭あげ、「何とて某が名を讀み落し給ふぞと、中干「言葉せわしく問はれしに、康頼もうち驚き聲うるみ、實に不審しき事なれど、御名は更に見え侍らず、俊寛聞いて、さては筆者

の誤りか、今一度讀せ給へとありけるを、使の元康進みより、某都にて承はり候に、中干「成経康頼の二人は御供いたせ、俊寛は一人この島に、残し申せとの御事なり、吟替「あゝこは如何に何事ぞ、罪もおなじく配所も同じ、非常もをなじ大救なれ、崩レ「一人誓の綱にもれ、沈むは何の因果ぞや、今日迄は三人一所にありてすら、さも恐ろしく凄まじき、荒磯島にたい一人、離れて海士の捨草の、浪の藻屑にあらねども、寄る邊もしらぬ浮き身やと歎くに甲斐も渚なる、千鳥も共に啼くばかり、思ひに餘る俊寛は、さきに讀みたる巻物を、幾度となくうち開き、あゝ繰り返し見給へど、中干「成経康

頼とある斗りにて、僧都とも俊寛とも。書ける文字は更に無し。こ
はまた夢か幻か、夢ならば、覺よくと云ひ續け、一人涙に暮
給ふ、

玉兔 晝眠 雲母 地、 金鶏 夜宿 不萌 枝、

寒蟬 抱古木 鳴盡 不回 頭、

といふ詩の心は、俊寛僧都の身の上を、切今こそ思ひしられる。

俊寛 (下段)

去る程に、時刻移りては叶はじと、中干「楫子の言葉にせかれて、

名残は更に盡ねども、成經卿は夜の衾を、康頼は法華經一卷を、中干
「各々遺物に残し置き、さまたぐ慰めまゐらせて、大干「船に乗らん
とし給ふを、中干「俊寛袖に縋りつく、元康聲を荒げて、僧都は叶ふ
まじと言ひ放つ、崩れ「あゝ憂やな公けの、私といふ事あれば、せめ
ては向ひの地までなりとも、情に乗せて連れ給へと、涙を袖に包み
かね、のたまふ聲の終らぬに、中干「哀れや無情の楫子共、櫓擡を
ふり上げ打たんとす、俊寛今は叶はじとや思ひけん、縋る袂の手を
放ち中干「一時は宿に歸らんと、睡は後方にかへせども歸らぬもの
は心にて、楫子の無情も元庸の、怒る言葉もち忘れ、中干「又立ち

歸りて出船の、綱にとり付引き止むる、楫子ども綱を仕切つて、船を深身に押し出す、中干「詮方浪に跳り込み、船よくと呼はれど、かへす模様もあらざれば、方及ばず俊寛は、元の渚にひれ臥て吟替「彼の松浦佐用姫の、歎きも我れに及ばじと、悲み給ふも哀れなり時を感じては、花にも涙をそそぎ、別れを惜みては、鳥にも心を動かすといふ事あれば、人として、歎き別の悲しみを、中干「知らぬ者こそ無かるらめ、されば成経も庸頼も、涙乍らにさし招き、中干「我等は都に上りなば、善き様にとりなして、やがて御迎へに参るべし 中干「心強く待たれよと宣ふ聲も幽かなる、頼みを濱の松かげに

中干「聞くや如何にと夕浪の、寄するまに〜俊寛は、中干「たい手を合せ頼むぞと、呼はる聲も呼ぶ聲も、次第〜に遠ざかる船もかすかに人影も、消えて見えなくなりけり、切「消えて見えなくなりけり

○石 童 丸

月に叢雲花に風、中干「心のまよにならぬこそ、浮世に住める習ひなれ、こゝに筑前筑後肥前肥後、大隅薩摩の守護職の、加藤重氏其の人は無情を感じ世を捨て、切「諸國修業に出でたまふ、大干

「残されたりし妻や子は、思ひ待つこと十餘年、父上高野に在り
と聞き、石童丸は母上と、菅の小笠を傾けて、旅の勞れの厭ひな
く、やうやく高野の禿宿、明日は逢はんと喜べど、女人禁制の山
なれば、母を麓に残し置き、中干「是非なく石童たゞ一人、杖を力
にたどく」と心細道踏み分けて、峰の薬師や瀧不動、手を合せつ
く伏し拜み、其夜は其處に假寝して、笠の屏風に肱枕、中干「諸行
無常と告げ渡る、鐘の音いと身に沁みて、大千「九百九十の寺々
や」峯谷々の阿彌陀佛、菩薩念じて尋ねれど、父ぞと思ふ人もな
く、中干「三日二夜は早や過ぎぬ、麓の母を案ずれば、後曳るゝ心

地して、松吹く風の音までも、母の聲かと疑がはる、

ほろ／＼と鳴く山鳥の聲聞けば

父かと思ふ母かと思ふ

と行基菩薩の詠れたる、歌の意も思はれて、歩むともなく歩みつ
く、無名の橋にさしかゝる。左手に花を右手に珠數、光明眞言
唱へつゝ、中干「苾芻道心下り坂、見上げ見下す顔と顔、石童丸の
振袖と、高祖の袖ともつれあふ、その時袖に取籠り、中干「あな御
僧よこの山の、今道心を教へてたべと乞ふ様の、見れば一人の幼
兒が、腰にさしたる脇差も、中干「見覚えのある顔に、さては不思

議とは思へども、さあらぬ體にもてなして、石童丸に申すやう、
 尋ぬる人の名を書きて、札場に建つれば逢ふことも、あらむと聞
 きて泣き沈む、石童丸を荻萱は、憐み給ひ手を取りて、切己が
 住家に連れ歸り、大千「國は何處で名は何と、問はせ給へば涙ぐみ
 國は筑前松浦の、加藤左衛門重氏が、忘れ形見の石童と、聞て荻
 萱胸迫り、せき來る泪どめあへず、石童それと悟りしか、若し父
 上に御座さすや、明してたべと前により、後に廻り荻萱の、顔覗
 き込み懇ろに、乞はるゝ時の石童を、中干「あら懐かしの我が兒や
 と、言はんとせしが名乗り兼ね、大千「其荻萱は去年の秋、空しく

なりぬと宣へば、石堂又も泣き沈み、せめて墓所を教へてと、請
 はれて荻萱是非もなく、墓場に連れ行き指して、これを父の墓な
 れと、教へ給へば石童は、力なくく跪つき、泪に濡し袖袂しほ
 りも敢へず香を焚き、雪より白き手を合せ、南無阿彌陀佛と伏し
 拜む、姿を見つる荻萱は、切「胸も張り裂くばかりなり、大千「十
 年に餘る修業にて、生者必滅會者定離、本來空の道理を、悟りな
 からも恩愛の、情には脆きものなるか、墓場に倒れし石童を、抱
 き起して徐ろに、涙は佛の爲めならず、一度下りて母上にこの由
 言ふて回向せよと、諭されければ石童は、泣くく山を下りつゝ

母に告げんと来て見れば、哀なる哉母上は、石童丸を待ち兼て麓の道邊に枯残る、中干「草葉の露と消えたまふ、吟替「あゝ父上には生別れ、また母上に死別れ、天にも地にも便りなく、あとに便りは姉一人、逢ふて此由語らむと、歸りて見れば姉も亦、この世を去りて影もなし、扱も無情き浮世かな、更け行く夜半に霜牙へて磯山松は音に泣く、千鳥しばらく松浦瀉浪に漂ふ捨小舟、曳く人もなき石童は、高野に在りし其時に、憐れみ給ひし御僧より、中干「外に便りはなしと知り、再び高野に蒞萱の、庵たづねて御弟子にと、請はれて蒞萱是非もなく、打ち連れ立ちて國々を、修業な

しつゝ信濃なる國に住所を定めさせ、師弟と名乗る斗りにて、親子地藏と唱へよと、切「遺言したまふ哀れさよ、信濃に名高き善光寺、石童丸の本尊に、親子地藏の在すなり、親子の縁は斯くまでも、中干「断つても断れぬものなるぞ、今は昔の物語り、南無や大悲の地藏尊、切「南無や大悲の地藏尊

○小 督

頃しも秋の半ばの空、眺め勝ちなる御袖に、切「涙の露を拂はせたまひ、大干「宿直に侍ふ、彈正大弼仲國を召され、如何に仲國、切

「小督の行衛を知りたるか」、大干「内裏を逃れ出しより、嵯峨の邊りにいさゝかの、知己たよりて在りと聞く、汝如何にもして尋ね出で、この文傳へてよとの仰なり」、仲國つくく思ふやう、嵯峨の邊りとはかりにて、主人の名をだに知らざれば、中干「尋ねんまはなけれども、小督の殿は、世に知られたる、琴の上手におはすれば、今宵最中の月かげに、君の御上おぼし出で、一曲をだに調べ給はぬ事よもあらじ、兎も角も調べいで參らせて、敬慮を安め奉つらんと、心に思ひ定めつゝ、畏まりぬと聞え上げ、直に御前をまかり立ち、寮の御馬に打ち乗りて、吟替「隈なき月に鞭を

あげ、雄鹿啼くこの山里と詠じけん、嵯峨野の奥に分け入れば、閃きわたる白露に、尾花の袖もうち濕り、鳴き交したる蟲の音に、浮世の善悪も思はれて、獨心痛めつゝ、家ある毎に立ち寄りて、切「問へど知るもの更になし」、大干「如何はせんと駒を立て、只茫然として居たりしが、中干「若し寶林寺にや在すらん、龜山近く到りしに、賤垣遙に聞えたり、崩「峯の嵐か松か風か、尋ぬる君の琴の音が、止めつゝ行けば一とむらの、松の蔭なる片折戸、内に聞ゆる瓜音を、手綱ゆるめてつくぐと、聞けば誠や月花の御遊のむしろに侍りて、笛の役仕うまつりしとき、聴き覺たる調に

殊更曲は想夫戀。さては紛れはあらじとて、腰より用笛ぬき出し
 少しばかり吹きならし、やがて駒より飛びおりて、門をほとく
 叩き、これは仲國、内裏より御使に参りたり、開させ給へと訪ふ
 に、琴彈き差し、静まりかへりて音もなし、やゝありて、いた
 げしたる小女房、門を細目に開ながら、顔ばかりさし出し、あや
 しの賤か伏屋に、内裏より御使など賜はるべきにあらず、門違ひ
 にやお座らんと云ふに、仲國はなまじに應答しては、門さゝむと
 思ひけむ、是非なく押あけ内に入り、妻戸の椽に進みより、何と
 てかゝる處に御渡り候ぞ、中干「君には旦暮思ひ沈ませたまひ

つや〜供御も聞し召さず、御命さへ、ほとく御覺束なふこそ
 見へ給へり、斯く申さば、うはの空にや御在すらんと、御玉章を
 参らすれば、吟替「あらなつかしの雲井やと、御文顔に當て給ひ
 暫し言葉も涙の雨に、晴れたる月や曇るらん、仲國も、そいろに
 せき来る涙を押へ、とかく慰さめ参らせつゝ、袖の衣絞るばかり
 になりける、稍ありて御返り事、引結び、女房の装束一と襲、
 賜はりければ肩にかけ、君にもさこそ待ち侘びておはすらむ、重
 ねて御迎へに参るべし、待たせ給へと言ひ捨て、切「駒を早や
 めて立ち歸り、ありし次第を残りなく、奏するほどにはの〜と

秋の夜長も明けにけり、切秋の夜長も明けにけり、

獨吟琵琶歌

明治四拾五年二月拾五日印刷
明治四拾五年二月廿五日發行

〔複製不許〕

編纂者 琵琶歌研鑽會

薩摩

定價金拾錢

琵琶歌

發行所 山口屋書店

振替東京九七六五番

東京市日本橋區横山町三丁目六番地

發行者

荒川龜次郎

東京市日本橋區横山町三丁目六番地

印刷者

藤川龜吉

東京市京橋區南小田原町一丁目九番地

浪界 春日亭清吉、浪花亭峰吉、三升家一俵

浪花節名人會

最負々々の力瘤と、講演者がおのれやれとの執園を、嘗て演藝趣味を以て鳴らした東亞新報が、正しき審判の浪花節投票、其芽出度々結果の披露とし、明治座の大舞臺に晴れの催し、如何に其當撰者各自が講演振の美事なりしか、浪通にして聞き逃した人の殘念を想ひ、亦聞きし人には其快絶の長き紀念にと、演じ競ふたる舞臺を其儘茲に一卷としての出版、居ながらにして通子は夫れ名節を知るとは此本、此本!!

本文一冊付
寫真一冊付
全一冊
定價 金廿五錢
郵税 金四錢

吉川清之助講演

堀部安兵衛傳

本文ふし付、長講讀切
口繪寫真判挿入
紙數二百四拾頁
定價廿五錢 郵税四錢

八斗の才を酒にして、酔ひたいで買ふ喧嘩の口利、酔へばたわいの愚圖安さん、江戸は八百八丁堀で札附きの赤鞘、何が愚圖事あらば其剛猛、酔醒の一息に名も高田の斬つたりやな幾人のみかは既に幼にして義母の仇討、後は赤穂の君公が其念をつぐ、四拾七士が中の一際の際の武者振、茲にさる者吉川清之助の講演は开も堀部安兵衛武庸と伴ひ來たりて、此卷の一開一閉に踔勵風發、あゝ壯たる哉、快なる哉、此本、此本……

浪界諸大家講演

(講演者寫真版挿入)

浪花節研聲會

本文一冊付
全一冊付
定價金四錢
送料金四錢

(演題)

白	辨	牧	佐	島	敵	慶	木
石	天	野	倉	田	討	安	村
天	野	倉	義	一	觀	太	堪
春	彌	兵	民	郎	音	平	忍
子	兵	衛	傳	郎	丹	記	袋
嘶	衛	衛	傳	郎	次	記	袋
若	虎	虎	善	清	峯	辰	
遊	平	好	門	確	風	吉	燕
正	佑	滑	高	小	伊	紀	田
宗	稽	田	栗	井	文	宮	孝
孝	天	赤	馬	判	直	世	子
子	西	屋	場	官	人	鑑	傳
傳	俠	屋	場	官	人	鑑	傳
風	滔	榮	清	虎	峰	三	若
右	次	之	右	右	右	右	右
衛	天	郎	助	門	吉	叟	門
門	天	郎	助	門	吉	叟	門

浪界諸大家講演

(講演者寫真版挿入)

浪花節親睦會

本文一冊付
全一冊付
定價金四錢
送料金四錢

(演題)

大	赤	一	戶	玉	安
石	垣	休	村	菊	中
內	源	蟻	丹	燈	草
藏	藏	川	三	籠	三
之	源	問	郎	籠	三
助	藏	答	郎	籠	三
雲	辰	大	峰	蓉	虎
右	辰	大	峰	蓉	虎
衛	辰	大	峰	蓉	虎
門	辰	大	峰	蓉	虎
毛	寬	日	鹽	大	名
谷	政	露	原	久	物
村	力	戰	太	保	隅
六	士	爭	助	武	田
助	傳	爭	助	藏	川
虎	虎	虎	小	鏡	圓
好	吉	右	福	圓	圓
	好	衛	車	車	車
		門	車	車	車

秋山仙朴著

秘傳 新選圍碁大全

和製全一冊
金拾五錢
郵稅四錢

圍碁は吾人の娛樂用として最も高尚なものである、その由來する處遠く、而も年所を経るに従つて旺んになつて來た、本書は即ち著者が苦心に苦心を重ね、實地手をとつて教へるやうに圖解した所謂秘傳である、本書を一度縮くなら、何んな初心者であつても、直に碁盤に向つて黑白を決することが出来るのである、活動の士は時に閑日月を樂しむと言ふ、先づ一本を求めて此樂を享けられよ。

266

877

